

ヴィルヘルム・ハマスホイの室内画における同時代性 —装飾と絵画の観点から—

矢橋 佳音（京都大学）

デンマークの画家ヴィルヘルム・ハマスホイ（1864-1916）の室内画には、17 世紀オランダ絵画や 19 世紀前半のデンマーク絵画など過去の作品からの影響が見られることが、これまで P・ヴァズらによって指摘されてきた。一方、画家自身が同時代の芸術家にはほとんど言及していないこともあり、ハマスホイの絵画と世紀転換期の諸芸術との関係性についての議論は未だ途上にある。しかし彼の室内画の特性理解にあたり、その「同時代性」を明らかにすることは不可欠である。本発表では、当時のデンマークの雑誌記事などの一次史料を基に、彼を取り巻く同時代の芸術潮流の特性を捉えつつ、ハマスホイの室内画がその中でどのように位置づけられるのか検証する。

まずハマスホイの室内画と同時代の室内装飾との関係に注目する。彼の室内画の多くは自宅を描いており、そこに登場する家具は 19 世紀初頭に流行した簡素なアンピール様式であった。従来、19 世紀末デンマークの室内装飾は、重厚な家具や鮮やかな色彩の布製品を用いた華やかな様式が主流であったと考えられてきたため、これまでの論考ではハマスホイは同時代の流行に反した懐古主義者としてみなされてきた。しかし M・ジェルフェア＝ヨアンセンらの近年の研究により、当時のデンマークの室内装飾は多様な側面を有しており、N・C・ロム（1839-1919）による国内の伝統的手工芸の再興や、アンピール様式の再流行など、簡素で伝統的なものに美しさが見出される風潮も広がっていたことが明らかになっている。本発表では、『家庭』誌等に掲載されたハマスホイの生前のインタビュー記事や、彼が実際に所持していた家具を基に、彼の室内装飾に対する態度を再検討し、彼が簡素さに美を認める同時代潮流に呼応していたことを論証する。

また同時代画家が手掛けた室内画との関係性について、従来の研究では印象論的な比較に留まることが多かったのに対し、本発表では歴史的事実を踏まえた実証的な視点から考察を行う。まずエドガー・ドガ（1834-1917）とハマスホイの空間表現の親近性に注目し、その背景に 19 世紀末デンマークにおけるドガ受容があったことを指摘する。またジェームズ・マクニール・ホイッスラー（1834-1903）の簡潔な室内表現や、逸話性よりも色彩構成を重視する姿勢がハマスホイと共通していることに着目し、ホイッスラーがハマスホイの芸術性の根幹に関与していることを示唆する。さらにエドゥアール・ヴューヤール（1868-1940）らによる象徴性や精神性を帯びた室内表現が、デンマークにおける象徴主義の受容を通じてハマスホイ作品にも反映された可能性を提示する。

以上の議論を通じて、ハマスホイの室内画は、同時代の室内装飾やデンマーク内外の芸術潮流と密接に結びついており、ハマスホイは過去の芸術に学びながらも、時代の趨勢と共鳴しつつ独自の表現を追求した画家であると結論づける。